

メープルレター（66）

秋深し（？）

しとしとと降る雨の多いモンリオールの秋です。日本の残暑がうらやましいほど、お日さまには縁のない日々です。この分だと紅葉も深まり、アツという間に終わってしまうのかもしれませんが。

オールドモンリオールの港には、この時期には、紅葉がりの遠出をする乗客を乗せた豪華客船が引きを切らずにやってきます。早朝に大棧橋に着き、夕方に汽笛を三度ならし出港していきます。こうした旅客船には必ず救命ボートがついています。

「救命ボートの数で乗客の数がわかるんだよ。」

ドリトル先生のこの言葉に誘われ、リハビリの散歩がてら、マダム田中は早速、船を見にでかけ、救命ボートの数を数えてみました。早朝着いたこの船はどう見ても2000人乗りと言える大きさです。救命ボートは、二階建てで椅子に座れる、150人乗りの大きなボートです。この救命ボートが船の左右合わせて7艘。つまり約千人分。中にも救命ゴムボートがいくつかあるとしても、どうみても何百人か、救われない人もでるのではないかと疑問がわきます。タイタニックのイメージが突然浮かんできます。それに、デイカプリオのような美形がいつもいるとは限りません。少しだけ、大型豪華客船への夢が失せた瞬間でした。

9月は、こちらでは学校の新学期にあたり、何かとせわしない感じですが。夏の間にごっと背丈の伸びた子供たちが新しい学用品と教科書を買そろえ、学校に向かいます。孫のクロエ（娘の娘）は、9月から新しい保育園になりました。以前の保育園は政府の予算カットの煽りをくいと経営が難しくなり、閉園されました。やっと慣れたところで、残念な気がしました。仕事を持つ今の女性には保育園は子育てに不可欠となっていますので、娘は必死で探し回りました。ママ友のアドバイスで、カトリックの修道院の保育園に空きが見つかり、そこに9月から通うことになりました。

カトリックの尼僧姿の高齢の修道女が面倒をみてくれます。とても穏やかな雰囲気なようです。誰より喜んだのはドリトル先生です。敬虔なカトリックの家庭で育ち、教育されてきまし

たので、修道女は家族なようなものだそうです。そんな嬉しいスタートを切ったクロエでしたが、通い始めて2週間後のある日、

「クロエが脚を骨折したのよ。保育園でひょろっとよろめいて転んだら、自分の脚の上に座りこんでしまって折れたみたい。歩き始めの赤ん坊にはかなり多いらしいわ。」

と娘から連絡がありました。

「エーっつ！」

マダム田中はただ驚くばかり。

「ばあーば（日本語でおばあちゃん）、ポーポー（フランス語の幼児語で、出物、腫物などを指します。この言葉で幼児の怪我やおできは済ませてしまいます。）」

孫はテレビ電話で画面にいっぱい脚の青いギブスを指しだします。相変わらず、ニコニコ笑いながら、何と楽観的なことか。。

「ポーポーブルー（青）だねえ。」

マダム田中と全く外人の孫のクロエとのたった一つの共通点はどうやら骨折なようです。違いは、1歳半の孫の骨折はたった3週間で治り、後期高齢者のマダム田中は半年かかります。マダム田中は、この差が恐ろしいと改めて思っております。

幸いにも、今のギブスは良くできていて、濡れても自然に乾き、このままお風呂にも入れるようです。登録したばかりの水泳教室もこのポーポーブルーのまま参加したそうです。保育園も歩けないとは言え、這い這いで自由自在に動き周り、シスターの気配りもあり、楽しく過ごしているようです。

こんなある日、マダム田中はコロナ禍や転倒事故でのびのびになっていた、友人のランチの招待に出かけていきました。友人は、ご主人と一緒にピアノの製造や修理及びピアノのレンタルのアトリエを経営していて、つい最近アトリエをもう少し広い場所にと引っ越したところです。ご主人はもともと、有名な調律師なのですが、夢はグランドピアノの音やニュアンスをアップライトピアノで出せる改造ピアノを作り上げることなのです。アメリカのピアノ製造者と長年一緒に研究し、手がけてきた夢なようです。日本のヤマハでも調律の修行もしてきました。まあ、ピアノの王様のような人です。どこか取りつかれているような気がします。長い付

き合いになりますが、ご主人のこの傾向は変わることはなく、友人はひたすら、彼の夢の実現のため身を粉にしております。

グランドピアノの音やタッチやニュアンスが出る魔法とはどんなものなのでしょうか。アップライトピアノのメカニズムを変えるため、部品を作って変えたり、取り付けたりする過程を見せてくれました。ハイテクを使えば、こうした新しいアップライトピアノが工業化できるのだそうです。音も確かに美しく、広い深いニュアンスも感じられます。彼の夢はこのピアノの工業量産ともう一つは、この新しいアップライトピアノを、ハイテクを使い、年齢や好みに合わせた個人的なものにすることなのだそうです。全く正反対な傾向ですが。。。この新しいメカニズムのピアノは、ヨーロッパあるいは中国で、近いうちに工業化されることになるようです。日本では興味を感じていないのか、反応がなかったとがっかりしていました。僕の好きな日本で、僕の新しいピアノを作ってくれたらどんなにうれしいことか、とため息をついておりました。

このアトリエの中には、ちいさなコンサートホールもあり、演奏曲が録音できるようになっています。彼の最初のアトリエのオープンイングの時に聞いたピアノの曲が今でも思いだされます。あのオープンイングにはニューヨークからピアニストが二人きました。アップライトピアノが二台。ラフな黒の上下のイケメンピアニストと雪道を歩き続けてきたようなグダグダのブーツをはき、ダサイワンピースを着た、乱れ髪のおばさんピアニストが、それぞれピアノを弾き始めました。とりあえず、ショパンの曲をそれぞれ軽やかに美しく弾き始めました。会場はただうっとり。しばらくするとショパンの曲はジャズに変わり始め、もう完全なライブハウススタイルです。二人とも即興でただ弾きまくりです。やがて、曲が変わり、今度はバッハのクラシックの曲です。やがてそのバッハの曲はジャズ化。熱気が高まります。「止まらない、やめられない」かっぱえびせんのようなピアノの音の世界が展開していきました。

「彼らは、ただ音楽が好きなの。ピアノが好きなの。音楽の世界はほおっておけばこうなるのよね。」友人は、その時、そう語っていました。

魔性のように語るピアノの音の世界とそのピアノを作り出すピアノのマジシャンの世界。しとしと降る雨にもリズムが感じられる午後のひと時でした。。